

2023年度 第25回 愛恵エッセイ受賞作品集

“豊かな福祉社会を創るために”

－ わかりあえたらなあ －



公益財団法人

愛恵福祉支援財団

2023年度 第25回 愛恵エッセイ賞 受賞作品集

“豊かな福祉社会を創るために”

－ わかりあえたらなあ －

公益財団法人

愛恵福祉支援財団

助け合って 生きていってね

愛しいその声を 忘れない

たとえ理想通りにいかなくとも

秘めて 永久に歩いていく

愛と光が降っている

あの日と未来とこの時が

私たちを 信じている

表紙・詩 土田 千恵

2023 年度 第 25 回 愛恵エッセイ賞 受賞作品集 《目 次》

“豊かな福祉社会を創るために”

～ わかりあえたらなあ ～

ごあいさつ……………愛恵福祉支援財団 理事長 (4)

■ 学生の部

〔最優秀賞〕

・命のバトン……………鈴木 朋子 (6)

〔優秀賞〕

・手を取り合うために……………水本 園乃 (9)

〔佳作〕

・つながり、重なり、支えあう地域社会～わかり合うために～ ……田淵 聖依 (12)

・無意識を意識する……………高橋 朋希 (15)

■ 専門職の部

〔最優秀賞〕

・“わかりあう”ために大事な、必要なこと～私の体験から～ ……福井 正人 (20)

〔優秀賞〕

・質の違いに仮説を立てる～ ASD 者とわかり合うために～ ……大内 雅登 (23)

〔佳作〕

・一緒に悩んでこそ道が開ける……………工藤 孝之 (26)

■ 一般の部

〔最優秀賞〕

・降車ボタン……………後藤 順 (30)

〔優秀賞〕

・絆のチカラ……………見澤 富子 (33)

・「わかりあう」ための VR 活用 ……原田 純子 (36)

・ご機嫌貯金……………阿部 松代 (39)

〔佳作〕

・寿司職人……………大西 賢 (43)

・分かり合うために必要なこと……………後藤 里奈 (46)

・響き合う心……………森野 泉 (49)

■ 外国籍の部

〔最優秀賞〕

・東日本大震災からの教訓 -「安全」と「安心」をつなぐ- …… ジョニー・シュワーツ (54)

〔優秀賞〕

・隣との繋がり…………… LEE WOJIN (57)

〔佳作〕

・お互いを知るために私たちがしなければならないこと…………… 尹 錫俊 (60)

※作品において用語が統一されていませんが原文を尊重しました。

あとがき…………… (63)

ごあいさつ

公益財団法人 愛恵福祉支援財団
理事長 遠藤久江

ここに、愛恵エッセイ賞 第25回目の受賞作品集をおとどけします。

25年の長きにわたりご応募による支援と、読者として支えてくださったご協力に厚く御礼申し上げます。

愛恵エッセイを広く募集する事業は当財団設立当初より実施しており、2012年に公益財団法人になってからも一貫して「豊かな福祉社会を創るために」をテーマとして掲げてまいりました。

広く社会福祉の「今」を問いかけ、「長期的」に求められる社会福祉の姿を「エッセイ」という形式で表現していただけてきました。

それぞれの生活環境から紡ぎだされる「ことば」は時代を反映し社会に、環境に訴えるものでありました。時々「ことば」が生まれ、成熟して次のものへと移っていきます。

コロナパンデミックによって、バラバラにされかけてきた社会に、追い打ちをかけるようにいくつもの戦争が「破壊」を続けているという悲しい現実があります。

争いのない、平和な社会でありたいとのこれまでの応募者の「ことば」が生きて共生、共感・福祉の言葉を溢れさせたいものです。

学 生 の 部

■最優秀賞

命のバトン……………鈴木 朋子

■優秀賞

手を取り合うために……………水本 園乃

■佳作

つながり、重なり、支えあう地域社会～わかり合うために～ …… 田淵 聖依

無意識を意識する……………高橋 朋希

■ 最優秀賞

命のバトン

鈴木朋子

「人は、どうして生きているんだろう」今年ほど、その問いを自問自答した年はなかった。きっかけは、大ファンだった芸能人が急死したというニュースだ。つい数日前までストーリーを更新していた彼のインスタグラムは、もう永遠に動かない。いくら心の中で生きていると言ったって、彼本人はもういないのだ。生まれて初めて「死」を感じ、鳥肌が立った。

「どうせいつか死んでしまうなら、何をしたら無駄じゃないか」寝ても覚めてもそんなことを考えていたある日、父に呼ばれた。遠方に住む祖父に会いに行っておほしいということだった。数年前に倒れてから入退院を繰り返し、今は介護施設暮らしの祖父は、恐らくもう長くはない。生きているうちに会えるのは、これが最後になるかもしれない。口にせずとも、父の表情からそう読み取れた。

新幹線と在来線を乗り継ぎ片道3時間半、私は祖父にかける言葉を必死に探していた。日常生活でここまで年齢の離れた人と話す機会はほとんどないため、何を話したら盛り上がり、何の話題はNGなのか、さっぱり分からない。しかも、祖父と最後に会ったのは小学生の頃だ。定年まで教師をしていた祖父は寡黙な人で、元気な時でさえまともな会話をした記憶がない。第一、私のことを覚えてくれているのかも怪しいのだ。ああ、祖父は私なんかより、もっと会いたい人がいるんじゃないだろうか。車窓を流れる見慣れない田園風景が、余計に私に疎外感を感じさせた。

祖母と合流し、初めて訪れた介護施設は、想像よりずっと温かい雰囲気だった。結局気が利く言葉は一つも思いつかないまま、私は車椅子に乗った痩せ細った祖父と、パーテーション越しに向き合った。最初こそ緊張していたものの、介護スタッフの方が積極的に話を振って下さったおかげで、自然な会話ができるようになった。

祖父に「ごはん、美味しい？」と尋ねると、「たくさん食べてますよね」と介護スタッフの方が笑い、祖父も照れるように笑った。こんなふうに笑う人だったんだ。私の中の祖父よりずっと優しく、丸くなったように感じたのは、祖父にとって施設が心から安心できる場所だったからだろうか。祖母に私のことを覚えているか尋ねられた祖父は、何秒か私を見つめたあと、スタッフの方が置いておいてくれていたペンを手にした。血管の浮き出た皺くちゃの震えた手から、昔教師をしていた頃そのままの、毎年年賀状で見ていた達筆な文字がしたためられたのを、私は見た。祖父の書いた「大学、がんばれ」を見たとき、私は確かに、「分かり合えた」と思った。「お孫さん、来てくれて嬉しいね」、スタッフの方にそう耳打ちされると、もう声を発することも難しい祖父は、私を見て優しく笑った。

先月、祖父は亡くなった。葬儀には多くの人が訪れ、祖父のために涙を流していた。私は、初めて会ったはずの親戚の人々に、「大きくなったね」と、何度も声をかけられた。私の成人式の写真を携帯に保存している親戚もいた。祖父の若い頃の話、戦時中の満州の話、お経を上げてくれた住職の方の話、祖父母のさらに祖父母の話、色んな話を彼らから聞いた。こんなに多くの親戚がいて、こんなに多くの人々が私の成長を見守ってくれていたなんて、今まで全く知らなかった。

SNSの普及で、同じような価値観を持つ人と手軽に繋がれるよ

うになった反面、立場の違う人とわざわざ向き合う機会は少なくなったように思う。私もそうだった。だから、祖父と話すのに緊張したし、住む場所も年齢もかけ離れた親戚と、どんな距離感を取ればいいのか戸惑った。だけど、きっと、正解の距離感なんてない。私自身が心を開いて、「分かり合いたい」姿勢を見せること。その姿勢こそが、豊かな福祉社会の第一歩だろう。

祖父の棺には、介護スタッフの方々からの色紙が入っていた。その隣で穏やかに笑う祖父を見ていた祖母の、「おじいちゃん、幸せだった」という呟きを、やけに鮮明に覚えている。祖父は、介護スタッフの方々や医療関係者の方々に支えられて、人生を全うした。そのことが、今生きている私を、とても幸せな気持ちにさせてくれる。人はみんな、いつか死ぬ。だけど、確かに残るものがある。

命の繋がりを支える福祉社会の必要性とありがたさを、私は祖父を通して学んだ。命のバトンを受け継いだ者として、私も今後多くの人と繋がり支え合い、胸を張って生きていきたい。

■ 優秀賞

手を取り合うために

水本園乃

近年、多様性への理解が進み、様々な生き方を選択できるようになったことを背景に、障がいを抱えた人々が、地域の中で暮らす事例が増加している。

例えば、障がいを抱える人々が共同生活を営むグループホームだ。そこでは、本人の出来る範囲で、親元から離れて自立し、生きがいに満ちた生活を送ることができる。

また、まだ一般的とは言い難いものの、重度の障がいをもつ人が、多くのヘルパーの助けを借りながら、一人暮らしをすることも徐々に広まりつつある。

これらの取り組みによって、地域の中で障がいを持つ人々の存在が認知され、差別の解消や、有事の際の迅速な対応に繋がっている。

しかし、時代の変化に制度や周囲の理解が追い付いていないことも多く、障がい者自身や、その家族、彼らを支える人々に多大なる負担が生じていることも事実だ。

その最たる例が、障がい者を地域で受け入れる住まいの圧倒的な不足だ。国は、障がい者の地域移行を掲げ、入所施設の数減らそうとしているが、それに代わる受け皿が確保されているとは言い難い。そのため、障がいの特性や、親の高齢化・病気・死亡等により、家庭で生活することが難しくなった障がい者の中には、遠くの入所施設に入所したり、ショートステイを転々としたりなど彼らの人権が軽視された生活を送らざるを得ない人が多い。また、預け先が確

保できず、家族が限界を超えながら世話をするケースも多数ある。障がいがあっても、地域で生き生きと暮らすために、入所施設の規模を縮小させる、という国の施策と、親が亡くなった後、子供が安心して暮らせる終の住処を探したい、という親心。そのどちらもが、障がい者の生活、人権を考えているのは明白だ。しかし、制度を設計する国が、障がい者を抱える家庭が求めるニーズを捉えきれていないことが、家族・障がい者本人ともに限界を迎える1つのターニングポイントになっていることもまた事実である。

もう1つ、福祉に関する考え方について齟齬が起きている事象がある。それは、「インクルーシブ教育」である。インクルーシブ教育を導入している教育機関では、従来のように障がいの有無で学ぶ場所を分けるのではなく、障がいを持つ生徒も持たない生徒も同じ教室で学習する。例えば、大阪府豊中市にある南桜塚小学校では、特別支援学級に在籍する児童全員が通常学級で学んでいる。障がいを持つ児童を、クラスメイトが友達として自然に支え、できないことをそっとサポートする——そのようなことが日常的に行われているのだ。インクルーシブ教育は、子ども同士の自然な関わりの中で、多様性への理解や自立心を育む重要な役割がある。実際、件の小学校では、児童が「当たり前なことなのになぜ取材に来るのか？」と質問しており、インクルーシブ教育が、障がいへの差別や偏見、特別視を無くし、相互理解を深めることに貢献していることがよく分かった。

しかし、文部科学省は、昨年4月に出した通達で、特別支援学級に在籍する児童生徒は授業時間の半数を特別支援学級で過ごすべきだとした。もし、この通達通りにいけば、障がいを持つ児童は、クラスでできた友人と引き離される時間が増えるということになる。

勿論、障がいの特性に合わせた教育は必要だが、長年のインクルーシブ教育で培われた友人との関わり、助けを求める力、協調性が失われてしまうのは、児童にとって大きな損失ではないだろうか。

では、当事者の抱える問題に対する理解のずれを正し、誰もが暮らしやすい社会にするためにはどうしたらいいのだろうか。私は2つのことを提案する。

まず1つ目は、障がいを持つ人々と関わる機会をもっと増やすことだ。現在の社会は多様性への理解が進んでいるとはいえ、生活空間がまだまだ分けられている状態だ。私自身も、小学校までは特別支援学級の児童との関わりがあったが、私学の中高に進学したために、その後は殆ど関わる事がなかった。しかし、大学に入学し、心理学を学ぶ傍ら、障がいを抱える学生と出会う中で、日常生活で障がいをもつ人々との関わりがどれほど重要であったのかということを感じた。多様なバックグラウンドを持つために、様々な考え方を吸収できるので、人生を豊かにすることができるからだ。だからこそ、学校での交流やボランティアを通して、積極的に交流を持つことが大切であると思う。

2つ目は、当事者から発信される情報にもっと耳を傾けることだ。近年はSNSの発展や、当事者への取材数の増加が功を奏し、当事者の日常や、抱えている問題がクローズアップされる頻度が増している。文字や動画を通じた生の声、メッセージを聞けるようになったのだ。それを真摯に受け止め、日々の関わりや支援に生かしていくことが肝要である。

多様性への理解が進みつつある今だからこそ、互いが互いを認め合い、真の意味で分かり合える社会になることを願っている。

■ 佳作

つながり、重なり、支えあう地域社会

～わかり合うために～

田 淵 聖 依

ガッシャーッ！この音に驚いて私は振り返った。そこは都心にある総合公園で、私は福祉フェアに参加するために訪れていた。周りに居た人も何度も鳴り響く音の方向を見ながらひそひそと話し込んでいた。その音の方向には自転車の二人乗りをして、後輪に乗った白杖を持たれた方が、点字ブロックの上で違法駐輪をしている自転車を一台また一台と蹴って倒していく音だった。そして、大声で『こんな場所に停めるな』と憤っておられた。

その光景を見た私は、言葉にならなかった。違法駐輪の場所は、公園の一角で地下鉄の入り口前にあり、何度も警告やロープを張って注意を促しているが、後を絶たないようだ。社会全体が施設や設備のバリアフリー化を推し進めている中で白杖を持たれている方への配慮が行き届いていないことは、いまだ解決できず遺憾に堪えない。しかし、白杖を持たれた方がこのような方法でしか、自らの憤りや困難を訴えられないことに社会の歪みを感じた日だった。その後、倒された自転車を警備員の方が『またか』と移動させながら私と目が合い、笑いながら『モラルって大事だね』と呟かれた。

この出来事から私は『シンガーソングライターかしわもちかずと』君の存在を思い出した。小学生の時、地域の福祉講演会で初めて彼の歌声を聴き、家族で大ファンになった。かしわもち君は特徴のあるシンガーソングライターで、彼も白杖を持ち視覚特別支援学校に

通いながらプロデビューし、ギターやハーモニカで優しい音色を観客の心に響かせていた。ギターはお琴のように膝の上で寝かせて弦を弾き、ハーモニカは種類を間違えないようにポケットのついた布に上から順番に入っている。そして作詞作曲を行い彼はライブ中に観客が見えないため、MCでは『手拍子や声を出して反応してほしい』とメッセージを伝える。そこで、私は視覚障害の方とのコミュニケーションを彼の歌を通して大いに学んだ。

かしわもち君の歌詞には、普段の生活で目が見えないことによって感じた怖さや悔しさを歌うだけではなく、見えないことは個性でそこから得られた感謝の想いがかしわもちソングには詰まっている。それには、環境汚染物質を排出せず、脱炭素化社会の実現を目指すために生産される電気自動車は、視覚障害者には音が静かで走行してもわからず危険を回避できないことや駅のホームで案内を知らせるために駅員さんから腕を引っ張られたときは前後の感覚がなくなり方向を見失うことなど、私たちが知り得ない社会を歌詞から気づかされる。かしわもち君はライブで「誰かのために生きてこそ、人生には価値がある」というアインシュタインの言葉を引用し「自分の音楽を多くの人に楽しんでほしい」と語る。

自分の気持ちを素直に表現する音楽を作る彼を私は、シンガーソングライターと言う関係だけでなく一人の人間として尊敬している。なぜなら私も左手に障害があるからだ。音楽の授業でリコーダーが吹けない私に何度も同級生にからかわれ、指が届かず楽器試験を免除されたことで『卑怯な手を使っている』などと心無い言葉が飛び交うこともあった。薬指は皮膚が伸びず、曲がったままで鳥の足みたいと笑われ、何度も移植手術を行ったが完治はしないとされた現実にこの悔しさや憤りをぶつけるところがなく得意な分野で表

現しようと言論大会や作文を書く『良い子ぶって』と破られゴミ箱に捨てられていた日。潰れそうな心を先生に相談すると『わざと作文を破ったんじゃない?』と言われ、言葉はさらに私を傷つける刃となり、その刃を受け入れる心の準備が整わないまま、いつしか人に左手を見せないよう隠して生活する癖がついていた。

その様子を見て母は、かしわもち君のお母さんに話をするとこのように仰られた。『目が見えなくなっただけ手があるし、足がある。左手が動かなくなっただけ右手がある。わからない人がいてもわかってくれる人も必ずいます。それが子どもたちの個性だから』と。私はこの温かい言葉を聴いて、今まで何ができないと諦める理由にしていたこの左手に自信がついた。

そして障害を恥ずかしいと思い込んでいたことを強さに変えたいと考え今、自分にできることを表現したい。昨今、複雑化した今日を生きる私たちは、一人一人が異なる存在で価値観も多様化している。その現代社会で共通の基盤を見つけるには、同じ痛みを負う者でしか相互理解は得られないのだろうか? いや、そうではない。自らが幸せでなければ人を幸せにはできず、自らを大切にできるからこそ、人を愛せるのだ。人々が健やかで文化的な生活を保障された社会で日々、心豊かに生きるには言葉による伝達は最も重要だ。情報化の進展による変化を知り、やり取りすることが分かり合うための働きに繋がる。そのために他者との異なりを認め、歩み寄る社会を創造していきたい。

無意識を意識する

高橋朋希

自分が日々無意識に過ごしていることに意識を向ける。私は、この身近で簡単なことこそ、「わかりあう」ことにつながり、より多くの人に住みやすい社会を作れるのではないかと考えています。

私たちが生活する中で、つい忘れがちになるものといえば、何があるでしょうか。私は、「当たり前」とってしまうものこそが最たる例なのではないかと考えています。私自身を例に挙げれば、日本人、男性、理系、大学生…のように属するコミュニティや、英語は難しい、理科は楽しいといった主観が最たるものです。そしてこれこそが、現代社会で独自性を形成するとともに、「わかりあい」を最も難しくしている原因であると私は考えています。

日々の生活、行動、思考を振り返ってみると、自分の生き方は、属するコミュニティに影響を受け、また、そこで過ごすことに特化していることがわかります。そして同時に気が付きにくいということもわかります。例えば、日々の話題となるのは、講義、食事、部活など。相手を考えると、その多くは大学の友人など同じような境遇にある人ばかりであることにも気が付きます。私たちは、大学なら入試が、会社では就活が、サークルでは申し込みがあるために、何気なく会話する相手も同様の手順を踏んだ意思の持ち主であるため、水準が似通ったものとなり、会話が続くことが「自然」であると錯覚するようになるのだと私は考えています。

一方、街中に出ると、隣に立つ人は全く異なる価値観や考え方を
持つ他者であることがほとんどとなるのです。私が、最も強く違い
を実感したのは、日本語教師としてある外国人の男性にある例文を
教えたときでした。「私は水が欲しいです」という、日本人には平
易な文でしたが、意外にも解説には数分を要しました。相手の母語
である英語には日本語ほどの助詞の活用例がなかったためです。英
語と日本語の翻訳は、数多くこなしていた自分でも「英語で日本語
を理解する」という観点が欠落していたことを痛感しました。

以降、私は街中で見かける案内に、より意識を向けるようになり
ました。外国語が書いてあるかどうか、日本語が平易であるかどう
か。冗長な文には忌避感を覚えることすらありました。ただ、この
ように粹がっていた私を再度挫くものが現れました。今度の相手は
大学の実験で書くレポートでした。平易に、簡単に、と考えすぎて
いた自分は、専門用語でなければ表せない結果という対極の存在に
出会った瞬間に、口惜しさを感じました。簡潔性のためには、専門
用語が必要。わかりやすさのためには、長い説明が必要。相反する
手段を利用しなければいけないことに、私は悔しさを覚えました。

解決策を考えていると、案は意外な場面から出てきました。教養
のためと選択していた授業の中で、単語の持つ微妙な意味の差を
習ったことがきっかけでした。なぜ気持ちを表す単語が、天気を表
す単語が、行動を表す単語が膨大な量、存在するのか。逆に、単一
の言葉で表すと何故具合が悪くなるのか。という言葉に関する授業
であったものの、ここに言葉の持つ本来の意味を私は深く理解する
ことができたと感じています。

言葉とは、本来「自分の考えを相手に共有するため」に存在する
のではないのでしょうか。従って、正確性を高めるためには複雑な

単語が、即時性を求めるなら平易な単語が選ばれて使われるのではないのでしょうか。つまり、誰でも使えるためと思って平易な言葉で情報を伝えると、緊急時の専門職同士でのやり取りでは却って危険を招く恐れがあるほか、相手も研究者だからと難しい言葉で指示したら理解するまでに時間が掛かり、結局良い結果を得られなかったという状況が生まれる可能性を私は十分にあり得るものだと考えているのです。

私たちは往々にして、相手との会話に慣れ始めた時点で話が躓くものですが、この理由の一つに、適切な単語を利用できなかったことで、相手に意味が伝えきれなかったということも考えられるのではないのでしょうか。

個性が重要視される時代にあって、全く同じ境遇にあり、全く同じ考えや語彙力を持つという人は減少傾向にあるのは間違いなく、一方で、私たちは相手に対して、正確で適切な意味を伝えなければいけないということも間違いないでしょう。その中で、自分と相手が異なる立場、同じ状況にあることを踏まえて、その場に合わせたより適切な言葉を選べるように努力する。普段の基本的な行動で忘れがちな「当たり前」がなぜ起こるのか。忘れがちなことを考えながら過ごすことがより「わかりあい」のできる豊かな社会を形成するのだと私は固く信じています。

専門職の部

■最優秀賞

“わかりあう”ために大事な、必要なこと ～私の体験から～ …… 福井 正人

■優秀賞

質の違いに仮説を立てる～ ASD 者とわかり合うために～ … 大内 雅登

■佳作

一緒に悩んでこそ道が開ける…………… 工藤 孝之

■ 最優秀賞

“わかりあう”ために大事な、必要なこと

～ 私の体験から ～

福井正人

リハビリテーションの養成校を卒業して約30年になる。現場に出るにあたり、担任の教官から“人との絆を大事に、信頼関係を構築していくように”ということ投げかけられた。現在も、現場の福祉的実践においてそのことが土台とされていて、難しい場合が多いというのが本音だ。

ただ、卒業後暫くは、この土台部分について“どうにもならない”、“わかりあうのは無理だ”と思い込んでいたケースに度々ぶちあたった。そのときの思いとしては、限界というか、何か『別枠』のようなものを感じ、あきらめに似たものが思い浮かんでいたと思う。また一方で、自分の方は、構築するにあたって“間違いはない”、『“正しい”側』という思い込みというか、おごりのようなものもあったのも事実である。

しかしそれから、その＜考え＞を打ち消す一つの体験をした。その体験から端を発した＜考え＞の変化は、現在も私のなかで“わかりあえない”という『枠』を外すきっかけになったとともに、人との絆を紡いでいくうえで、“わかりあえる”ための芯（あるいは幹）となる見方となっている。

その出来事は、卒業後務めたリハビリセンター（福祉機関）で出会った慢性期（*発症から5年が経過）の失語症の方とのことである。私は自分の信念でもあり、誠実に、一生懸命訓練プログラムを考え、実施した。当事者もそのことはよく感じていたようである。担当して3

年が経過しようとしていたとき、私はその方に一つの提案をした。「もう十分訓練をしました。本当に頑張られました。失語症はご病気になられてから3年を過ぎると、改善が非常に難しいといわれています。生活面においても越えられない壁があります。これからは、ヘルパーさんなどの手を借りて、買い物などいろいろなことを楽しまれてはどうか……」。この助言をしてから、その方はパタリと来られなくなった。代わりに聞こえてくるのが、私に対する批判であった。「あのセラピスト（=私）は、薄情だ」。

暫く、その言葉の衝撃に苦しみながらも離れられず、少しずつ考えていった。内省をしてみた。考えに考えた。そして、自分なりに気づいたことがある。「あの方（=失語症者）は、とにかく訓練へ来たかった、訓練を受けたかったのだ」と。そのとき、自分（=私:セラピスト）は“わかった”つもりになっていたと…。確かに、授業や教科書に従い、的確に、丁寧に助言をした思いはある。しかしながら、私は“わかっていなかった”。少なくとも、あの方はくままだまだ訓練を受けたかった、ここへ来たかった>のであろう。私は表面的にしか、“わかっていなかった”のだ。単に、知識に沿った障がいの特性という観点からしか、部分的にしかみていなかった。個別の<人>として一全体から捉えようとはしていなかった。少なくとも、気持ちの面は全くわかっていなかった。また、その方の“可能性”をも否定しまっていた。思い上がっていた。そのかけがえのない…人ではなく、“障がい”という一般的なものの（状態）が主語になってしまっていた。

私がこの体験を通して痛感したところは、『“わかりあえる”』前の人を“わかる”とは、『障がいを含めて<人全体>を深く、深く、思んばかり捉えていくこと』ではないか。常に相手へ関心を置き、また敬意と尊重の心を持ち、なおかつ、<（〇〇さんと）共に——>という精

神を忘れず関わっていくこと。その上で、『“対話”』を相補的に積み重ねていくことが重要であると強く感じた。そこからは何かしら温かい、＜共感＞と＜共有＞が生まれ、『“真のわかりあえる”』関係が構築されるのではないだろうか。辛かったけれども、この貴重な体験を糧にして、これからも支援に努めていきたい。必ずや『“わかりあえる”』と……。

■ 優秀賞

質の違いに仮説を立てる ～ASD者とわかり合うために～

大内雅登

自閉症スペクトラムの人たちと定型発達者との間にはわかり合えない大きな壁がある。自閉症スペクトラムの人たちには共通した特徴があり、その中のひとつに「コミュニケーションの質の違い」があるとされてきた。これがローナ・ウイングによって発表されてからはや50余年。いまやこの言説は多くの自閉症当事者たちによって否定されている。そもそもコミュニケーションがうまくいかない原因を一方にだけ押しつけることには無理がある。とは言え、自閉症当事者と定型発達者との間にコミュニケーション不全が起きやすいことは否定できない事実であり、双方に原因があると言ったところで、自閉症当事者をいわれなき差別から解放することにこそなれ、わかり合うための解決にはならない。

私は、発達障がい児を支援する事業所で支援員をしているが、もしかしたらこの解決につながる糸口になるのではないだろうかという体験をした。

その日、高校生の男の子が、大学のオープンキャンパスへ行ったことを話してくれた。

「僕は、〇〇大学のオープンキャンパスへ行きました。お茶を飲んだり、話を聞いたりしました。大学ではご飯を食べました。」

文字にするとこれだけのことだが、胸に手を当てながら、言葉に詰まりながらも一生懸命に話してくれた。5分ほどの説明だった。

私が「そうか。するとその大学に行きたくなくなっちゃったね」と返事をする、口角を上げたと思いきや「はい、僕はそこで文学を勉強したいです」と答えた。実は、この男の子と会話をする、口角が上がる瞬間をよく目にするようになった。どうも私の反応に一瞬、ほんの一瞬だが笑っているようなのだ。

さて、この男の子に限らないことだが、自閉症スペクトラムの人たちの話し方の特徴として、事実の羅列や、行動が伴わず特に感情面での内容に欠けることが知られている。この男の子も例にもれず、どんな話を聞いたか、何を食べたかなどの内容や気持ちが述べられていないことがわかる。では、言っている内容に不十分さがあるとして、その実、何が言いたかったのかを考えてみる。私は「大学が気に入った」という男の子の話にはない情報を投げかけている。もし、そこで見た口角の動きが「我が意を得たり」のような満足だとすれば、彼の肯定の返答と共に、私の推察が当たっていたことが証明されているように思う。つまり、この男の子は事実の羅列をしながら、この大学が気に入った話をしていたということになる。事実の羅列ばかりで感情が語られないのではなく、事実の羅列に感情が込められている可能性を私はくっきりと感じた。

もしかしたら、自閉症の人たちとつながる糸口になるのではないかと思うのが、この表現の違いへのまなざしである。

自閉症の人たちにとって、事実を語ることと感情を語ることが必ずしも別のことではないというこの仮説は、極端な話当たっていなくても構わないと思う。自閉的な人と定型の人は表現が違うからね、というところで足踏みをするのではなく、どう違うのかを踏み込んで考えることこそが糸口になるということだ。さらに言えば、この踏み込み方は他方を貶めるようなものであってはならない。こちら

にはできるけども、あちらにはできないよねという優劣で考えると質の違いではなく、量の違いになってしまう。定型発達者から何かを引き算するような見方は避けなければならない。

冒頭触れた「コミュニケーションの質の違い」が、現代において個人の問題ではないと否定されているわけは、その言説を絶対的なものとせず、そのことを考え続けた人がいる結果だと思われる。

もちろん、言葉の大きな役割のひとつに、相手に何かしらのことを伝えるというものがあり、きちんと述べられていない表現を見ると、この男の子の話し方に不十分さや未熟さはあると言える。しかし、定型発達者がよく言う「空気を読む」というものが、言外の情報を読み取ることを指していることを考えると、単純に男の子の話し方の不備だと言い切れなくなるのではないだろうか。男の子の話ししていることを、辞書的な言葉の意味でだけ捉え、出来事だけが並んでいるように聞こえているとすれば、言外の情報を読み取っていない多数派の姿がそこにあり、その意味ではお互い様である。

わかりあえないのが自閉症だからね。あの人たちは感情を話題にするのが苦手だからね。

自閉的な人たちの不備であるとする、ある意味わかりやすい物言いに納得をすることなく、そこにある違いはどう違うのかを考え続けるとき、その先にわかり合える未来が待っているように思う。

■ 佳作

一緒に悩んでこそ道が開ける

工藤孝之

現在、私は湘南に位置する福祉事務所で主に生活保護受給者の就労支援相談員に就いている。コロナパンデミックがようやく沈静化に向かい、社会経済が活況を取り戻しつつある状況になったとは言え、病気や失業、さらには親の介護など、さまざまな理由から日常生活に困窮する市民は決して少なくない。そうした方々が最後の拠り所として頼る場所、それが福祉事務所の相談窓口である。

ある日、年配女性のAさんがやって来た。独り暮らしで68歳になるというが、元気そのもの。3ヶ月前までスーパーの品出しをしていたが、高齢を理由に仕事を打ち切られた。本心は生活保護を受けたくない。でも貯金は底をついた。ここに来れば相談に乗ってくれる、と近所の人から聞き、30分自転車を漕いで来た、という。初回相談では窓口相談員が応対する。生活状況の聞き取り、生活保護制度の概要説明、生活保護に該当するかどうかの予備判断、今後の手続きなどだ。就労支援までは進まないのが普通だが、今回は私の出番となった。概要説明で就労支援の話に触れた際、Aさんが強い関心を寄せ、すぐに相談したいと願ったからだ。

就労支援で大事なことは、いかに相談者に寄り添えるか、だと思っている。一緒に悩み、わかりあえることで課題や解決策が浮かぶ。Aさんの場合、働くことで社会とのつながりを持って、それが何よりも生きがいになるような気がした。そうであるならば、やれる仕事、少しでも希望の持てる仕事に挑戦させよう。今は年齢に関係なく働

くことができる時代だ。探せばきっとふさわしい求人はあるはず。

私は話しながらメモを取る癖がある。品出し、清掃、片付け、買物手伝い、調理補助など思いつくままAさんがやれそうな仕事と、その仕事の楽しさ・厳しさをキーワードで表現し、○で囲む。次に就労に向けた心構えや行動を追記し、それらを関連づけて線で結ぶ。こうしてポンチ絵風に仕上げていく。これが私のやり方だ。この結果、保育園や高齢者施設での調理補助が良さそう、と判断し、Aさんも納得する。早速、近場で募集がないか探すが、当てはまるがない。無理だと判断し、この日は一旦、ここまでで終えた。

別れ際、このメモを受け取るAさんがほっこりした表情を見せたのが印象的だった。

数日後、Aさんは生活保護申請に必要な書類を持って窓口を訪れた。事務手続きが済んだ後、担当のケースワーカーから呼ばれた。私のことをしっかりと覚えてくれていたのがうれしい。改めて求人探しに注力する。するとAさんにぴったりな新規求人が見つかる。就職は生魚を扱うような素早さが勝負だ。その職場はAさんの自宅から近い高齢者施設で、職種は食事の準備だった。まさに希望通り。朝6時からの勤務だったが、これも、「大丈夫」と即答。就労への意気込みがひしひしと感じられ、ここで就活態勢にスイッチが入る。応募の仕方、応募書類の書き方、面接リハーサルまで、具体例を示しながらの指南に、私の心も弾んだ。

それから何日か経って、相談窓口笑顔いっぱいのAさんがかけこんで来た。一目で新しい仕事が決まったのだとわかる。生活保護の申請を取り下げたのは申すまでもない。

近年、生活保護を取り巻く社会環境は厳しい。生活保護予備軍の生活困窮者も増加の一途をたどっている。住居確保、食料援助、教

育、借金問題など緊急を要する課題に対してそれぞれ専門の相談員が対処するわけだが、次にやるべきことは経済的貧しさからの脱却だ。仕事に就き自立するのが一番だ。それもAさんのように迅速に。早期の自立は生活困窮者だけでなく、行政側にとっても実に喜ばしく、就労支援の役割がますます高まっている理由がここにある。

福祉の仕事は定型外が多い。就労支援も同様だ。多様な就労阻害要因に対し、就労意識の弱さがその典型だが、心をつにしてプラス志向で取り組みたい。だが、これが意外と難しく苦労の連続だ。(相談者の気持ちをもっとわかりあえたらなあ)と反省するばかり。Aさんの成功例はしょっちゅうあるわけではない。それ故にうまくいった時はそれまでの苦労も吹っ飛ぶ。これ以上の幸せがあろうか。

この仕事を通して私は多くのことを学んだ。相談者の大半が自分に適した仕事をやりたいと願っていること。相談者とバクトルを合わせればその希望はきっと叶うこと。仕事・社会とつながれば新たな生きがいになること。こうした教訓を糧に、今後も、ケースワーカー・社協・ハローワークなど福祉に関わる仲間や団体と協力しながら、相談者に寄り添って自立させることに全力を尽くしたい。

一緒に悩んでこそ道が開ける。心の底からそう思っているこの頃である。

一般の部

■最優秀賞

降車ボタン……………後藤 順

■優秀賞

絆のチカラ……………見澤 富子

「わかりあう」ためのVR活用……………原田 純子

ご機嫌貯金……………阿部 松代

■佳作

寿司職人……………大西 賢

分かり合うために必要なこと……………後藤 里奈

響き合う心……………森野 泉

降車ボタン

後藤 順

路線バスを降りる時には、窓ぎわや手すりにある降車ボタンを押します。すると、自動音声で「次は停まります」と車内アナウンスします。初めての地でのバス乗車であれば、次はどここのバス停かとの案内表示があり、車内を注意深く観察する必要があります。

四月、初めて路線バスを通勤や通学などで利用する乗客には緊張感が走ります。混んでいれば降車口近くに移動しなくては降りられない場合があります。そんな乗客の一人にS子がいました。彼女は支援学校中等部に今春から通学するのです。ダウン症のために健常者のようには何事もいきません。始発停から二つ目のバス停から乗ります。余り混んではいませんが、母親から教えられた運転手のすぐ後ろの席が必ず空いているとは限りません。

三月、S子は母親と一緒に十数回、バスの乗り降りを練習しました。降りる時はこのボタンを押すこと。その周辺の風景を確かめること。席が空いてなければ、その近くで立つことなど。自家用車で通学する選択があったのですが、「自立」との願いを込めて、バス通学を選択したのです。いつも同じ運転手とは限らないので、運転手さんの詰め所にも二人で挨拶にいきました。

S子は、運転手さんが判る位置に定期券を首にぶら下げ、元気よく挨拶します。「おはようございます。よろしく申し上げます」。頭を下げる様子はととてもけなげです。バス停には母親が立ち手をふっています。「無事に今日一日が終わりますように」との心の願いが

伝わってきます。

乗客のなかで、S子がダウン症だと知っているのはどれほどいるのでしょうか。車内で喚くわけでもなく、身を縮こませて、降車ボタンを押すための、車外の風景を注視しています。押す風景が近く前、誰かがボタンを押したようです。手順通りでは、S子が押したはずでした。運転手さんが小声で「次のバス停だぞ」と教えます。また、S子がいつも座る席が、自分の指定席だと思っても、高齢者や子供連れの妊婦が座っている場合もあります。その場合、その席の傍らに立つこともあります。母親の教えた手順通りにいかない場合もあります。

運転手さんも交通安全に注意が向け、S子の存在を忘れる時もあります。何よりS子自身の自立心が求められますが、ダウン症に罹患した少女に限界もあります。

朝から強い雨が降っています。雨合羽を着てS子がバス停にいます。母親が自家用車で送るのを拒否しているようです。母親からすれば雨に濡れ風邪でもひくのを心配しているのです。少し自立心のついたS子にとって、それは過保護に思えるのです。バスが来ます。S子は母親の腕をふりきり乗ります。バスは混みあいS子の指定座席はありません。立ち位置すら揺らぎ、雨合羽状態のS子濡れないように乗客の冷ややかな視線が向けられます。「俺の服に濡れるじゃないか」。その怒りに満ちた声に、S子の心を打ち砕きます。「ごめんなさい、ごめんなさい」。すぐにでも降りたい衝動に支配されます。「降ろして、早く降ろして！」その悲鳴に近い声に車内は騒然とします。

運転手さんが冷静に車内アナウンスをします。「混みあって申し訳ございません。お客様のなかに、支援学校の生徒さんがいます。

どうか、ご支援のほどお願いします」。その一声に乗客たちはS子の存在を知りました。怒りの声をあげた人が、S子に謝っている姿を見た時、人は清い心で生きていると思いました。弱者に対する誠意、共に生きているという共感性、それらを喪失すれば人は人でなくなります。

翌日の朝、前日が大雨だったと思えないほど明るい陽射しがバス停を照らします。S子が笑顔で一番前に並んでいます。通りすがりの老夫婦がS子に声をかけます。「Sちゃん、今日も勉強頑張ってるね」。それに応えるかのようにS子の恥ずかしそうな顔が歪みます。S子と同じ時間帯にバス停に並ぶ人たちは、みんな顔見知りになっています。お互いの家庭の事情は知りませんが、同じバスに乗る意識でつながっています。S子が降りるバス停でのボタンを押さないのが共通認識になり、座席も同様になります。特別にS子への配慮をしている訳ではありません。

毎年の季節ごと、このバス停から乗車する人は変わっていきます。S子も三年過ぎればこの路線バスから卒業するでしょう。支援学級へ通学する別なS子が乗車するかもしれません。降車ボタンを押すということをS子やS男にあげてもらえませんか。厚かましいお願いですが、座席もお譲り下さいませんか。少しでも母親の気持ちになってみませんか。降車ボタンが人の善意で紅色に輝いているのは、ひとり一人の優しさの証なのではないでしょうか。

■ 優秀賞

絆のチカラ

見澤富子

「ばあちゃん。これ、ポストに出しに行こう」

朝の九時。孫と一緒に図書館に向かう。六十を過ぎた私の日課である。実を言うと孫は三年前に不登校になった。きっかけはコロナ禍。授業中に咳をしたところ「コロナだ」と言われ、傷ついた。もともと小児ぜんそくがあり、これまでも学校を欠席することはよくあった。しかし言葉は武器にも、凶器にもなり得る。これを機に孫はパタリと学校に行けなくなってしまった。長きに渡る不登校の始まりだった。

孫が学校に行けなくなってからというもの、二人で家で過ごす生活が始まった。国語や算数のドリル。それらを一緒にやっては丸をつける。しかしそこに『よくできたね』と褒めてくれる先生はいない。苦肉の策で図書館に行ったものの、むせる度に冷たい視線を浴びる。ひと咳でひと席空いた孫の隣。それをどうしようもない気持ちで見つめた。

やがて世間がマスクを外せるようになる頃、孫も通りがかりに校庭を覗くようになった。フェンス越しに仲間を見る。そのまなざしはどこか羨ましそうに見えた。

「ばあちゃん見て。何でもポストだって」

ある日図書館に行くと入口にあるポストに足をとめられた。

『手紙、絵、写真、何でもオッケー。必ずお返事をします』

そこで孫は自分が描いたイラストを投函した。すると数日後お礼

のメッセージが届いた。

『素晴らしい色使いですね。見ている人たちが元気になりそうです。とても上手なので公民館に展示してもいいですか』

それはもう驚いて。先生に褒められたみたいに嬉しくて。以来、孫は図書館に来るたびイラストや手紙を投函するようになった。

『私は学校に行きたくても行けません』

『いまはあせらないで。でもあきめないで。そのきもちをおうちのひとにつたえてみよう』

『私はぜんそくがあって、せきをするとコロナだと言われるのがすごくイヤです』

『咳をするのがダメなんじゃない。咳を笑う人がいけないんだよ』

悔しさ。切なさ。もどかしさ。すべての感情が入り交ざった『声』をボランティアさんは受け止めてくれた。またある時は『そのことをクラスのみんなに手紙で伝えてみたらどうですか』と返事が来た。孫は一念発起。自分の思いを一枚の便箋に綴った。

『三年一組のみんなへ。私はぜんそくという病気をもっています。みんなより体がよわく、すぐにかぜをひきます。夜もせきがとまらなくなることもよくあります。でも私はみんなと同じように勉強がしたいです。給食も食べたいです。運動もしたいです。だからどうかお願いします。せきをしても笑わないで。せきをしても席を離さないで。コロナだなんて言わないで。わたしはみんなと同じように学校に行きたいんです。』

手紙を届けに行った日。担任の先生は時折声を詰まらせながら読んだ。すると居合わせた保護者がハンカチで目頭を覆い、子ども達は神妙な面持ちで聞き入った。中には「お返事を書きたい」と言う児童まで。皆、皆、胸を打たれた。孫の思いが強いメッセージとなっ

て皆に届いたことは間違いない。

『ぜんそくのことをしらなくてごめんね』『またいっしょにあそびたいよ』『こまったことがあったら何でも言ってね』

クラスの皆から届いた三十八通のメッセージ。何だかやさしさの厚みみたい。孫はそれを読むなり、嬉しくて『早く学校に行きたい』と言い出した。その頃には明け方まで眠れないくらいの発作が出て、すでに入院を余儀なくされていた。それでも病院に向かう孫は笑顔だった。自分のことをわかってもらえたという安心感が自信につながったに違いない。

あれから二ヶ月。今も孫は小児病棟で入院生活を続ける。相変わらず咳は止まらないし、なかなか退院の目処は立たない。それでも病室にはみんなから励ましのお便りが届く。その一つ一つが治療薬。確かに手紙には顔を映し出したり会話できる機能はない。けれど伝えたい思いが、寄り添うまなざしが、文字を通してじんわりと表れる。そう。手紙って、一枚じゃなくて、一人なんだ。

たとえこの先つらいことがあっても誰かとわかり合えた記憶は、きっと、チカラに変わる。それを絆と呼ぶのだと孫は教えてくれた。

■ 優秀賞

「わかりあう」ためのVR活用

原田 純子

私は21歳から看護師として30年以上働いた。途中、上の子どもが小学生になったのを機に興味のあった、訪問看護師の仕事に就き、今22年が経つ。

7年前、以前からの体の動かしにくさが悪化、検査の結果「パーキンソン病」と診断された。診断後も内服しながら今年の1月まで仕事を続けた。いよいよ体の限界を感じ、仕事に支障を来してはいけないと退職した。まだ介護を必要とする状態ではないが、福祉についても相談・指導業務をしていた立場から、現在は「特定疾患療養受給」を受けて療養する立場にもなった。進行性のため、この先もいろいろと福祉にお世話になるだろう。

このように双方の立場を経験して思うのは世の中の人、皆んなが相手を思いやる気持ちだが、思いやるとまでいかななくても、相手の立場に立ってみるとどうだろうかという「想像力」があれば、私自身ももっと楽に過ごせるのかなと思うことがある。

現状、ハンデのある人が社会で生活していくためには、自分が何ができ、何に困っており、ヘルプを要することがあるということを理解してもらう必要がある。ハンデがある状況を理解してもらうために、ハンデのある人が発信していかねばならない。

私も「パーキンソン病」を診断されてから、まず職場の人達に、現状、予測される未来、今の希望を説明し、理解を求めた。職場は医療職が多く、言葉少なくてもすぐに理解してくれた。友人の数人

にも打ち明け、緊急時、子どものことで手伝ってもらうことをお願いするかもという、快く引き受けてくれた。

皆んな快く話を聞いてくれて、協力を得ることができたが、発信することは容易ではなかった。

日々の体調の変化、病気への受け入れに右往左往する日々。病気の受容が上手く出来ない状況で発信するには言葉が詰まり、どうしても尻込みしてしまう。結果、当人しか理解できない状況が生じ、相互理解は程遠くなる。

人が互いの理解を深めるには共有の経験をするとより深まる。一人の人間があらゆる事を実体験するのは難しい。

しかし、このご時世、バーチャルリアリティ、いわゆる VR の技術が進化し、リアルな疑似体験ができるようになった。これを福祉分野にも取り入れ、まずは「老化による機能低下」体験を学校の授業に取り入れる。それだけでも、今後さらに加速される、超高齢・少子化社会の福祉対策につながるのではないか。「老化」だけでなく、様々なハンディを持ちながらの生活疑似体験も促進できれば、制度だけでなく、マンパワーを活かしたソフト面への充実に近づくのではないだろうか。

今後、逆ピラミッドの人口分布図がすすむ社会に向けて、限られた労働力に対応すべく色々な業界が IT 化に取り組んでいる。しかし福祉分野においては、人が行うものという概念がまだまだ根強い。だからこそ、思いやり、想像力を働かせ、相手を理解するという部分から IT 化、VR 導入してみてもどうかと考える。

わたしも看護師の仕事を退職して約 10 ヶ月が経った。思うように動けない時間も増え、家族に手伝ってもらうことも増えた。体の不自由を経験し、今まで気がつかなかったことも分かるようになって

てきた。その都度、「もっと早くわかっていたら、もっとよりよい
看護ができたかも」ということもある。やはり経験することは大事
な事だ。この実感も体験からのもの。

豊かな福祉社会を創るためには、「思いやり」「相互理解」が重要
である。そのためにはITを取り入れつつ、ソフト面の充実を図る
ことで、皆がわかり合える、そして少しでも人に配慮ができる社会
になると期待している。

■ 優秀賞

ご機嫌貯金

阿部松代

軽度の認知症を患っている母、近所の実家で一人暮らしをしている。同居も考えたが、自由に暮らしたいと本人が拒み、私がときどき様子を見に行くという生活を続けている。身体は丈夫なのだが、物忘れがひどく、たった今のことさえも忘れてしまう。

約束をすっぽかされたり、何度も同じことを聞いてきたりするのは日常茶飯事だが、同じものをいくつも買ってくるのには閉口する。もともと料理が大好きな母、とにかく食材を山ほど買ってきってしまう。

生ものを冷蔵庫にしまうのを忘れて腐らせたり、腐ったものを調理したり。大量に料理を作っては冷蔵庫に入れていくため、いつも冷蔵庫はパンパン。冷凍庫に入りきれなくなったアイスクリームも押し込まれるので、溶けたクリームでベトベト。中で腐っていることも珍しくない。毎回、鼻をつまんで掃除に追われる始末。ついつい怒鳴ってしまう。

「なんでこんなに買うの？ あるものを食べてから買えばいいでしょ！」

母が言い返す。

「あなたには、私の気持ちがわからないのよ。買物と料理だけが楽しみなのに」

「お母さんこそ、私の気持ちをわかってよ。掃除が大変なのよ。もう買わないで！」

「頼んでもいないのに、あなたが勝手に冷蔵庫を開けるんじゃない。掃除は私がするわよ。もう来ないで！」

母はみるみるうちに涙目になる。泣きたいのはこっちなのに……。

母が異常なまで食材を買い込んでしまうのは、昔のトラウマからの危機感なのかもしれない。継父に育てられ、実の子どもとは食卓を別にされるなどの苦勞をし、結婚後は貧しい時期があり「子どもを抱えて食べるものがないというのは本当に辛かった」と聞かされたことがある。

しかし、そうとわかっていてもいざとなるとカッとしてしまう。医師からも「怒ったり責めたりしてはいけない。プライドを傷つけず、安心させてあげるように」と言われたが、ついつい大きな声を上げてしまうことも珍しくなかった。

実家に行く際は「今日は絶対に怒らない、笑顔で別れる」と自分に言い聞かせるのだが、成功率はかなり低い。

どうしたものか真剣に悩んでいたある日、冷蔵庫の掃除を終えて帰ろうとすると、いきなり母がゴミを入れた袋を取り、「私が捨てる」と言い出した。いっしょに捨てに行き、ゴミ置き場にゴミを置くと、私に向かって頭を下げる。

「いつも綺麗にしてくれてありがとう。ごめんなさい」

本心はそうだったのかと力が抜けた。母は異常に買物をしてしまうことも、買ったものがストレスになっていることも、自分では整理できないこともわかっているのだ。私が冷蔵庫を開けようとすると必死に抵抗するのは、母のプライドなのだろう。

すると、また一礼。

「これからもよろしくお願いします」

笑いがこみ上げてきた。「これからもよろしく」ということは、今後も買い続けるという宣言ではないか……ハツとした。

腐ったものを捨てるのではなく、腐る前に私でもらってくればいいのだ。

母は買ったことを忘れてしまうのだから、私が持って帰ってもわからない。冷蔵庫が空く分、母は買物や料理ができる。お互いにとってメリットがあるではないか。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

母にお辞儀をすると、嬉しそうに「こちらこそです」と笑う。久しぶりに見る満面の笑み。

母の「ありがとう」「ごめんなさい」で、母に歩み寄ることができた。こちらが歩み寄れば、向こうも、また歩み寄ってきてくれる。一步、わかり合えた気がした。

その後は、冷蔵庫を整理するのが少し楽しみになった。掃除ではなく「収穫」。そして食材をもらう分、母には石鹸やスポンジなど腐らない生活用品を渡す。

今では、ぶつかることが随分減った。私が機嫌よくいることが増えたからだろう。相手の気持ちを理解するには気持ちに余裕が必要だ。余裕がないと、自分の欲求だけでいっぱいになってしまう。

最近、「ご機嫌貯金」を心がけている。機嫌がよくなることをしたり、考えたりして「ご機嫌」を貯めて実家に行く。母が多少変なことをしても許せるし、おおらかでいられる。すると母の顔がだんだん和らいでいく。

機嫌は相手に伝染し、その積み重ねは気持ちの中に「感覚」として残っていくように感じる。

世の中、「わかり合う」ためにみんながご機嫌でいられたらいい。

機嫌をよくするには気持ちの持ち方にカギがあるのだろう。社会全体に「ご機嫌」が貯まっていければいいなと思う。

寿司職人

大西 賢

ジョンさんは黒人の寿司職人だった。アフリカの、日本人にはなじみのない国からやってきた男性で、身体の大きな人だった。黒い肌と筋肉りゅうりゅうの見た目から、いっけんすると威圧的な印象を抱くが、笑うととても魅力的な顔をする人だった。私は学生時代、皿洗いのアルバイトとしてその寿司店に雇用されたわけだが、それまで黒人の寿司職人がいることを知らなかった。

日本文化に精通し、日本語の冗談にもすぐに対応できるほど店になじんだジョンさんは、手先も器用で、魚をさばくのも上手だった。やがてジョンさんは、板場に立ち、握りを任せてもらえるようになった。親方から見ても、ジョンさんの腕前は一級品だったのだ。

ジョンさんが板場に立って数日後に、常連の男性グループが店に来た。数人でビールを飲みながら寿司をつまんでいたのだが、酒が入って抑制がきかなくなったのか、カウンター越しにこんなことを言った。

「しかし、なんだね。黒い肌で握ってもらう寿司はあんまりおいしいものじゃないね」

日本語の上手なジョンさんには、ハッキリとそれが聞こえていた。お運びをしている私にも聞こえたぐらいだ。酔った常連客には悪気はないひとことだったかもしれないが、店には大きな影響のある言葉だった。

今から三十年近く前の話である。黒人が寿司を握ることは一般

的ではなかった。正直、最初は私にも違和感があった。それでも、
緒に働いていれば、ジョンさんの熱心さと誠実さは分かってくる。
だが、お客さんにはそれが見えにくい。ひとことで寿司職人といっ
ても、裏で仕込みをする姿とカウンターで接客をしている姿では、
印象も感触も違うのだ。

酔った常連客の言葉に、親方も考え込んだ。平成不況の始まった
飲食業界で、常連客は逃したくない存在である。しばらく考えたあ
と、親方は、「ジョンは裏に回ってくれ」と指示するようになった。

ジョンさんの落胆ぶりはそうとうだった。

せっかく修行を積んで寿司職人になれたのに、肌が黒いというだ
けで寿司を握れなくなったのだ。アルバイトにも優しいジョンさん
だっただけに、私も心が痛んだ。

黒人だというだけで、レストランに入れない青年。なんとかして
黒い肌を白くしようと、石けんのついたタオルで必死に身体をこす
る少年。そんなシーンを古い外国映画で観たことがある。平成の日
本でも、外国人労働者に対する厳しい目というものは存在し、差別
や偏見も同時に存在していた。

ジョンさん自身は、寿司で大儲けしようとか、母国で家を建てよ
うなどといった野心は持っていなかった。奥さんとまだ小さい娘さ
んと仲良く日本で過ごせればいい。そんな小さな幸せを大事にしよ
うとしているだけだった。だが、黒人の握る寿司はまだ時期的に早
いと親方は思ったようだった。ジョンさんを裏方に回し、カウンタ
ーでの握りは日本人だけでおこなうようになった。しばらくたったあ
る日のことである。夜の営業を始めると、あの常連さんグループが
やってきた。「大将！今日のおすすめは？」いつもの酔っ払い口調
で一人がそうたずねる。親方は答えた。「今日はアワビの茶碗蒸し

があるんですよ」。常連さんたちは喜んだ。アワビの茶碗蒸しは滅多に店に出ることはなく、珍しい商品だったのだ。常連さんたちは、みんな注文した。

よっぽど彼らの口に合ったのだろう。「これ、おいしいねえ！作った人にビールごちそうするよ！乾杯しよう！」

上機嫌の常連さんがそう言ったのを聞いて、親方は少し困ったような顔で答えた。

「それ、作ったの、彼なんですよ」

そうなのだ。とびきりおいしいアワビの茶碗蒸しを作ったのは、裏に回されたジョンさんだったのだ。常連さんたちは一瞬、気まずそうに顔を見合わせたが、

「ジョンさんに乾杯！」

と、彼の料理に贅辞を述べた。そしてそれ以降、ジョンさんは再び板場に立ち、寿司を握ることを許された。常連さんたちは、もう誰もジョンさんの握る寿司を拒まなかった。

肌の色に関係なく、みんな分かりあえたらなあと思っていた。そしてそれは、意外なかたちで実現した。

肌の黒い寿司職人ジョンさんと分かりあうために必要だったのは、おいしい食事と笑顔だった。カウンターで寿司を握るジョンさんにイキイキとした表情が戻って、私も嬉しかった。

■ 佳作

分かり合うために必要なこと

後藤里奈

十年前、私は都内の私立高校で二年生の担任を持っていた。そのクラスには一人、脳性麻痺の男子生徒がいた。まだ教師としての経験も浅かった私は、脳性麻痺についてはもちろん、障がいのある子との接し方についてもまったく無知だった。最初はそんな自分に担任が務まるのか、不安が尽きなかった。学校で万一のことが起こったらどうしよう。他の生徒にいじめられないだろうか…。しかし、そんな私の心配は杞憂に終わった。彼は他のクラスメイトとすぐに打ち解け、移動教室など介助を必要とする時も周りの生徒が積極的に車椅子を押ししたり荷物を持ったりしてくれた。だが学校生活に慣れてくるにしたがい、本人に甘えが生じ始めた。困った時、周りの友人は自然に手を差し伸べてくれるが、それを当たり前と思っているような態度が見られ始めたのだ。毎朝車で登校すると、友人が玄関まで迎えに来て教室まで車椅子を押ししてくれること、掃除当番を彼の代わりに誰かがやってくれること、授業中、ノートを取ることのできない彼に、友人が自分のノートを貸してくれること。そういったことがすべて、やってもらって当たり前のことになっていたのだ。手伝ってあげてもお礼を言われることもない。話しかけても機嫌が悪いと無視される…。そんな彼の態度に不安を抱く生徒が増え始め、みんなが次第に彼と距離を置くようになってしまった。私は何度か彼に自分の言動を見直すように伝えたが、彼が変わることはなかった。

そんななか、修学旅行の季節を迎えた。クラス中が盛り上がるなか、気がかりなのはやはり彼のことだった。飛行機での長距離移動に加え、家族以外の人と宿泊するのも初めてだった。旅行には看護師さんも同行してくれるが、ずっと彼に付きっきりというわけにもいかない。きっと様々な場面で介助が必要だが、本人の態度が変わらない限り、これ以上周りに協力を求めるのは難しいと思われた。

かつてはクラスのアイドル的存在だった彼はもはや厄介者扱いされ始め、学校では数人の心優しい生徒が仕方なく彼の介助をしている状態だったのだ。だが本人は修学旅行へ行きたいらしい。確かに、一生に一度の修学旅行。高校生活のビッグイベントであり、一番の思い出になるだろう。私はこれが、彼が変わることのできる最後のチャンスと考えた。そして、「本当に行きたいのなら、今まで助けてくれたクラスメイトにきちんと感謝の気持ちを伝え、改めて力を貸してくれるようお願いするべきだ。」と彼に伝えた。

後日、彼はホームルームで「どうしても言いたいことがある。」と切り出し、皆の前で話し始めた。

「みんな、今までいろいろ助けてくれてありがとう。なのにろくに感謝もせず、わがままな態度をとってごめんなさい。僕が普通の高校で学校生活を送れているのは、みんなのおかげだということを忘れかけていました。みんなに迷惑をかけてしまうのは辛いけど、僕はどうしても大好きなみんなと一緒に修学旅行に行きたいと思っています。これからは僕もみんなのためにできることを考えていくので、できたらまた、力を貸してください。お願いします。」

涙ながらに、ゆっくりと絞り出すように話される彼の言葉に、皆真剣に聞き入っていた。彼が話し終わってしばらく沈黙が流れたあと、誰からともなく拍手が起こった。想いが通じ合った瞬間だった。

二週間後。私たちは無事に九州へ出発し、彼は三泊四日すべての行程に参加することができた。帰りの空港で友人たちに囲まれ、満足気な彼の笑顔はひときわ輝いていた。この旅行を機に、生徒たちは本当の意味で打ち解け、分かり合えたように思う。その後も彼は障がいをもものともせず様々なことにチャレンジし、「自分と同じように困難を抱えている人の役に立ちたい」と、福祉系の大学へ進学した。私自身、彼らの成長を目の当たりにして多くのことを学ぶことができた。

障がい者と健常者の隔たりとは結局のところ、お互いに相手のことをよく知らないから生じるものなのだと思う。知らないものは怖い。しかし、だからといって排除してしまえば一生分かり合えないままだ。私たちは本来、人と繋がりたい、分かり合いたいと思っている。だから衝突もする。それでも諦めずに本気でぶつかり合った時、初めて互いに歩み寄ることができるのだろう。障がいの有無に関わらず人と違うのは当たり前だ。だからこそ人は助け合うことができ、違うからこそ平等なのだ。学校という現場にいと、私たちの日常には成長できるチャンスがいくらかでもあることに気づかされる。それを生かすのは、ほんの少しの勇気と優しさだ。私はこれからも、「分かり合いたい」という気持ちを常に持ちながら、一人ひとりとの出会いを大切にしていこうと思う。

響き合う心

森野 泉

『社会的弱者』という言葉が嫌いだ。レッテル貼りのようで、その言葉自体が人権侵害なのではないかと思えてならない。こんな風に考えてしまうのは、私自身が『社会的弱者』だからかもしれない。

私の故父は、アルコール依存症で肝臓を患い亡くなった。母は身体障害者で、現在は要介護者として生活している。そんな両親の下で育った私の子ども時代は、今でいうところの「ヤングケアラー」だったのかもしれない。かつて流行った「アダルトチルドレン」だったのかもしれない。いずれにしろレッテル貼りに変わりはないが、レッテルを貼ったからといって私が私以外の何者かに変われるわけではない。もちろん、レッテル貼りはやめましょうなどと声高に言うつもりは毛頭ない。日本の行政や福祉制度を円滑に活用するためには、個人よりもカテゴライズ化された個が必要なだろう。

幼い頃の私に『社会的弱者』などという認識はなかったが、もしも当時「ヤングケアラー」という言葉を知っていたら、私はどうしていただろうか。「ヤングケアラーなんです、助けてください。」などは、決して言わなかったであろう。おそらく、世間から烙印を押されぬようにと、余計な神経を使っていたに違いない。

恵まれた環境ではなかったのだろうが、父も母も根底には子を愛する強い気持ちをもった人たちだったお陰で、紆余曲折ありながらも私は何とか生き延びることができた。そして、現在の私は心理士の看板を下げている。特例子会社で障害者の面談をしたり、心療内

科や学校で心理査定やカウンセリングをしたりすることが主な仕事だ。現在の私のカウンセリングのモットーは、クライアントと私との間にコンパッションを生み出すことである。

カウンセリングというと共感とか寄り添いといった言葉が多用されがちだが、使われ方によっては胡散臭さを否めない。たとえば、職場等の研修でカウンセリングの基礎をかじった人が、「障害のある人にはカウンセリング的な話し方じゃないとね。共感的にね。」などと言うときなど。私は（健常者であり障害者の生活を知らない人が、障害者の発した言葉のどこにどのように共感したというのか。そもそも、あなたのその心情が同情ではなく共感だと本当に言えるのか。）と腹の底でつぶやいている。と同時に、私は自問自答する。私は自分の傲慢さに気付いているのか。常に謙虚に相手の言葉に耳を傾け、自他を敬愛しているだろうか。

共感はやすやすとできるものではないし、カウンセリングで相手の全てを理解できるわけではない。それは聞き直りではなく、わからないからこそ、聴かせてほしい、教えてほしいという切なる願いからの言葉である。相手を100%の等身大でわかるということは不可能だ。だからこそ、わかりたいという思いを抱き続けなければならぬし、わかった気になった時点でわからなくなっていることに気付ける感性をもち続けなくてはならないと自戒する。その感性の根幹には謙虚な心が根付いていることが必要で、それは意識的に自己を知ろうとする過程で培われるものではないだろうか。こういう考えに至ることができたのは、グリーフケアを学んだお陰だ。

カウンセリングを重ねれば重ねるほど、私は臨床心理学だけでは限界があると感じるようになった。カウンセラーとしてもっと身に付けるべきものがあるはずと模索する中で出会ったのが、グリーフ

ケアの学びである。グリーンケア研究所での2年間は座学に加えて演習もあった。小グループの中で自分を語り、相手の語りに耳を傾けた。他者に対して自分の心を開くということがいかに難しいか、日頃の自分がどれだけ本心や本音を抑え込んで生きているかがよくわかった。怒りや羞恥、悔しさなど、相手に知られたくないあるいは自分で認めたくない感情と向き合うことは、精神的に苦しいことだった。しかし、この演習を繰り返す内に、どんな感情が湧いてもそれを愛しく感じるようになっていった。今ではカウンセリングの場面で、クライアントの語りを分析的に聴くだけでなく、クライアントの感情や思いにぐっと耳を傾けられるようになった。時に心を震わせ、互いの心が響き合うような感覚すら覚えることがある。

相手をより深く知ることは、相手を敬い尊重する気持ちがなくてはできないことで、『社会的弱者』というレッテルの下では成し得ないことだと私は思う。障害者や健常者の別なく、お互いがただの人として水平の関係でいられるときに、私たちは一瞬の光のように心を通わせ合い、響き合うことができるのではないだろうか。そのとき、本当にわかり合えたと思えるよろこびが生まれ、いのちの尊さに気付けるように思う。

外国籍の部

■最優秀賞

東日本大震災からの教訓

－「安全」と「安心」をつなぐ－…………… ジョニー・シュワーツ

■優秀賞

隣との繋がり …………… LEE WOJIN

■佳作

お互いを知るために私たちがしなければならないこと…………… 尹 錫俊

■ 最優秀賞

東日本大震災からの教訓 －「安全」と「安心」をつなぐ－

ジョニー・シュワーツ

私は医学生として、目の前の患者の健康や生命を尊重するとともに、どの地域に住む人も適切な治療を受けられる社会を目指し、日々実習や講義に取り組んでいる。特にこれまで、東日本大震災の長期的影響について、福島県浜通り地区での活動を通して、被災地の実情と復興に、研究の面から関わらせていただいていた。残念ながら、この地域が直面する深刻な医師不足といった課題は、震災から10年以上が経った今も、十分に改善しているとは言いがたい。実際、避難区域指定の解除から5年以上が経過した今年に入ってようやく、被災地の相双地域には薬局がオープンした。これまで、地域の患者は院内処方や町外の薬局で処方箋を受け取るしかなかったのだ。このような社会インフラが整っていない環境では、豊かな福祉社会を達成することは極めて困難だといえる。そして、震災からの復興の過程に焦点を当てることで、実現のために必要なものは何か、重要な教訓が見えてくる。

震災時、すべての人々が最初に求めたのは、物理的、環境的な「安全」であり、何よりも、建物の倒壊や津波から逃れ、生命を守るための避難が最優先事項であった。しかし、避難が長期化する中で、震災後の不明瞭な放射線情報などは被災者たちの不安を増幅させ、この中で人々のニーズは、物理的な「安全」から、家族と連絡が取れること、震災前から治療していた病気の薬が手に入ること、不在

の時に子どもの世話をしてくれる人がいること、といった、心理的な「安心」に向けられるようになった。安全な場所に避難したとしても、失った家や家族、そして将来への不安から安心することは難しく、行政や自治体による心のケア支援が行われてきた。

特に、この「安心」に対する被災者のニーズが一律ではなかったということは意識すべき点だ。被災者には高齢者や体にハンディキャップのある方、外国人など、様々な背景や状況を持つ人々が含まれ、一律の対応やサポートでは、すべての人のニーズを同時に満たすことはできなかった。例えば、高齢者は特に生活の基盤が失われることによるストレスや孤立感に苦しむ傾向があり、外国人にとっては言語の壁が大きな問題となることがあった。情報の正確な提供、そして互いの理解という形で信頼性を確立するコミュニケーションの重要性が浮き彫りになったのだ。

「安全」は事実やデータに基づく、確認された状態を示すものである一方で、「安心」はそれに伴う感情や信頼を示すものであり、必ずしも「安全」であることが、人々に「安心」を、実感として届けるとは限らないということを意識することが重要だ。この「安心」と「安全」の間のギャップは、情報の欠如だけでなく、人々の個々の状況や背景、感じるリスクに対する認識の違いからも生じうる。そのような多様性を理解し、尊重することは、社会全体の福祉を高めるための鍵となる。

この「安全」と「安心」の間にあるギャップの問題は、今年の福島第一原発処理水の放出を行う際にも再びハイライトされた。放射性物質を含むとされる水を、どのように処理・放出するかが大きな社会的議論を引き起こし、科学的な「安全」が保証されていたとしても、地域住民や関係者たちの「安心」は確保されていなかったの

だ。これは「安心」の定義が科学的データだけではなく、人々の心の中にも存在することを示している。情報が不足する中、様々なわさや誤解が生まれる可能性が高まり、それが不安を増幅させる要因となった。震災の経験を包括的に振り返ると、状況や事実だけでなく、個々人の心の中に対しても適切にアプローチすることが求められ、これが、人々が社会で「安心」して暮らすための不可欠な要因であることが実感される。

私の立場から言えば、医療もまた、情報の正確な伝達と相互理解に基づくものだ。医療の現場でも、患者にとっての「安心」は、科学的な「安全」を伝えるだけでは得られないからだ。治療方針や診断結果、薬の効果や副作用などの情報を、患者やその家族に明確に伝えることが求められるが、受け取る側がその情報を理解し、納得できるように伝えると同時に、一人ひとりの心に寄り添った形でも、情報を伝える必要がある。

豊かな福祉社会の実現は、情報発信やインフラ整備を適切な形で実施し、「安全」と「安心」のギャップを埋めていく過程で形成される。私自身も、自身の被災地での活動経験を元に、医師としての道を歩む中で、病院で「安全」な医療を提供するとともに、患者が病院から帰った後も「安心」して過ごすことができるよう、適切な情報提供、そして患者の状況や背景を理解したコミュニケーションを行うことの大切さを胸に刻み、社会との関わりを深める中で、豊かな福祉社会の実現に貢献していきたい。

隣との繋がり

LEE WOJIN

ここに韓国の留学生がいます。私は一人で韓国から日本に来ました。自分の夢のために、自分がやりたい事のためにです。異なる国、異なる文化、異なる人々の間で真の意味での独り立ちを始めました。もちろん、日本という国に関心があり目標もありましたが、生まれ育った国とは違う国で一人で生活することは自分にとって大きな苦難です。家族もなく、友達もない環境で働きながら勉強し、生活をしました。一人でご飯を食べて、一人で家に帰ってきて、日本で大きな寂しさを感じました。

そんなある日、隣の家に住んでいたお爺さんが「どこから来たの?」と私に話しかけました。その瞬間、私はどうして私が他の国の人なのか分かったの?という突拍子もない思いと共に「韓国から来ました」と答えました。私の返事にしばらく驚いた表情をした後、「ああ、外国人だったんだ!」と言いました。おじいさんは私が日本人だと思い、どこ出身なのかを聞いたかったようでした。私は笑いながら、「日本語がまだまだ勉強不足ですみません。」と言いました。今考えてもバカでした。でも、その後は、初めて話しかけられたことに驚いて緊張したという話をしながら、ここに住んでいるのかと質問しました。おじいさんは返事の代わりに少し顔を固めては一人暮らしをしていると言いました。その日から私とおじいさんはお互いに挨拶をする関係になりました。

ある日の学校帰り、古い家のガレージで椅子に座って休んでいる

おじいさんを見かけました。夕方の4時ころでしたがすでに顔が赤く、半分居眠りしていたので、お酒を飲んでいたと思いました。私が声をかけると、おじいさんは目を見開いて「あ、お前さんか」と言って姿勢を直しました。おじいさんはどこか悲しそうな様子でした。私もお酒が好きなので、「一人は寂しいじゃないですか。今度は私も呼んでください。」と言って家に帰りました。

それから3日ほど経ったあと、おじいさんは学校帰りの私に声をかけました。「夕食一緒に食べる？」その言葉に私は驚きながらおじいさんをみました。無表情に乾燥に誘うおじいさんの顔を見て「お邪魔します。」と答えました。おじいさんの家は外から見ると一見古びて見えてましたが、家の中は木のインテリアでとてもきれいに整っていました。「思ったより違いますね。」初めて訪れる日本人の家に私は興味津々でおじいさんに言いました。そんな私を見て「初めてだって？」という言葉とともに席に案内してくれました。「ドラマで見る機会は多かったです、このように直接見ることができてとても不思議な気持ちです。」という私の言葉におじいさんは笑いながら肉じゃがと芋焼酎、味噌汁、ご飯を準備してくれました。私を待っていたと言いながら、お酒は好きかと聞きました。私は笑いながら、かなり強いと答えました。ごはんを美味しく食べながらお酒を一緒に分かち合い、おじいさんといろいろな話をしました。

おじいさんは子供がおらず、3年前におばあさんを亡くしてからは一人でした。話を聞いているうちに、私も一人残された母方の祖母が懐かしくなりました。おじいさんと一緒に話したことで、お互いを知り、様々なことを考えるようになりました。自分がおじいさんと挨拶せずにそのまま通り過ぎたとしたら、このような経験はできなかつたはずです。挨拶から繋がった縁に感謝しました。そして

私たち皆がこのような偶然によって独り身のお年寄りの方々と繋がりをづくり、友情を築くことができれば孤独になるという問題を少しは防げるのではないかと思いました。私たちがもっと優しくお互いに関心があれば、ある程度の社会問題の解決策を見つけられるのではないだろうか。これらの経験がもっと社会を健康で豊かにするのではないだろうか。私たち皆がこのような経験を持つことができれば良いと思いながら、私はおじいさんと挨拶しながらたまにお互いの話を交わしながら友情を築いています。

■ 佳作

お互いを知るために私たちがしなければならないこと

尹 錫俊

福祉社会とは何かまず考えてみました。福祉社会は社会的に弱い立場にある人々が安心して生活できる社会であり、社会全体が福祉水準の向上を目指している社会です。私たちは高齢と病気で社会的に弱者の立場になる可能性を誰でも持っています。例えば私達の祖父や祖母、隣人などがいます。個人の努力だけで将来の不安に備えるには、多額の資金が必要です。また、それが不可能な人もたくさんいます。そこで社会全体が万一の事態を準備する、いわゆるセーフティネット（社会安定網-失業保険、年金など）の整備が必要です。

福祉社会は人間が互いに助け合って、すべての人間が安心して生活できる社会です。そのため、お互いがお互いをよく知っていかなければなりません。私たちの周りに少しだけ気をつければ、未来の不安のない社会の実現が豊かな社会の基本を作ることができます。

一般的に、人々が考えるには豊かな国は国民1人当たりの国民所得の大きさによって表されることが多いです。しかし、私の考えは違います。世界経済1位のアメリカは、すべての国民が幸せなのでしょうか？いいえ。では、アメリカに住んでいる幸せな人が他の国よりずっと多いのでしょうか？それもまた違います。経済的な指標だけで測定されない生活の質を考えるものとしては、下水道、公園、道路、鉄道、通信設備など社会的共通資本の蓄積の大きさも重要です。豊かな社会を実現するためには経済的な豊かさだけでなく生活の質の向上、安心して生きていける環境条件の整備が重要です。私

私たちは政府と地方自治体、そして企業に豊かな福祉社会の実現のために努力するよう要請する必要があります。同時に、NPO やボランティア活動などにも積極的に参加し、多様性のある豊かな都市をつくり、福祉社会の実現に努めていく必要があります。

高齢化問題にも注目しなければなりません。日本では急速に高齢化が進んでいます。最近では日本だけでなく韓国など他の国にも共通する問題です。すべての人間が自負心と生きがいを持って生きていける社会、多様な人々が同じ人間として共に生活するのが当然なノルマリゼーション的思考が定着した真の豊かな社会の実現が要求されます。私は日本に住み始めてから5年になります。韓国より日本でお年寄りの方を見やすいです。私は先日まで学生でした。全校生で韓国人は私一人でした。ところで、教授一人が私のことを本当によく気遣ってくれました。教授のおかげで良い会社にも就職することができたし、最近もたびたび会っていますが、もう今年70歳です。

私たちのような若い人たちにできることは決まっています。安否をよく尋ねること、バスや地下鉄で席を譲ることなどがあります。本当に難しいことではないので、今からでも実践してほしいです。私もいつもではないですが、努力をしようといつも気を使って実際に譲歩する日本の方々をたくさん見てきた。韓国もこういう点を見て学んでほしいですね。私たちが周りに関心を持って譲歩すれば、豊かな社会を作っていくことができます。

いつかは私たちに戻ってきます。一度しかない短い人生、他人に施しながら生きましょう！これが私の目標です。また、私たちがこのような姿を見せてこそ、その次の世代も続いて豊かな社会が維持されるのではないのでしょうか？今年のテーマは「豊かな福祉社会づ

くり - お互いを知っていこう」だが、最近各自が暮らしやすい社会になったと思う。これからはもっとそうなるといいと思います。もちろん他人に干渉せず被害を与えないのもいいが、周りを見回して気を遣ってくればそれもまたいいと思う。財布は豊かじゃなくて心だけでも豊かになりたいし、周りの人からあなたは心が温かい人だと思ってほしいです。

周りから親切だとよく言われますが、まだ足りないです。(笑)もう会社にも慣れてきたし、日本国内でボランティア活動もしてみたい。毎週ではなくても毎月意味深い行動をすれば、私の生活もより豊かになるのではないかと思います。韓国にもちりも積もれば山ということわざがあります。私たち一人一人が集まれば豊かな社会を作るのに役立つのではないのでしょうか？この文を書きながら自分自身も警戒心を持たせ、この文を他の人たちもたくさん読んで一度は豊かな福祉社会をどうすれば作ることができるだろうかと考えてみるといいでしょう。

あ と が き

2023年第25回「豊かな福祉社会を創るために」エッセイの受賞作品集をお届けします。

今回は副題を『わかりあえたらなあ』と致しました。わかり合えていない状況の中で、しかしそうではなくわかり合いたい気持である、という状況を表したつもりでした。

しかし作品群の中には「あえてわかり合えていないことをそのままにしておく」事の価値を論じていたものもありました。空気に流されず、多様性をもっともっと表に出すような生き方の意味を感じ、タイトルが示唆している方向とは違う論点も含まれていたことが驚きでもあり何よりの喜びでした。

受賞したか否かにかかわらず、審査員として心に残った言葉もご紹介します。

「心は晴れです」

90歳のデイサービス利用者の言葉。人生に感謝し、先に逝った奥様を思い、現在の福祉サービスへの感謝などからきた言葉はさわやかに晴れた空を感じさせてくれます。

「さすがに我が息子は武士の血筋。弱きを助けて強きを挫くか」

4年生の息子さんの話。障害のあるクラスメイトを守ろうとけんかになり、いじめた子どもにけがをさせてしまう。抗議の電話を受けて謝りに行っても、けんか相手のいじめを口にする事なく謝罪して帰ってきた息子を誇りに思う父親。この後先方の父親が事実を知り大団円に。

「お互いがただの人として水平の関係でいられるときに、私たちは一瞬の光のように心を通わせ会い、響き合う事が出来るのではないだろうか。」

障害者を親に持ち自身が心理士として人にかかわる仕事をしている筆者が『共感』というお互いの関係を更に深めたいと考えてたどり着いた心境。

「手紙って1枚じゃなくて1人なんだ」

登校できなくなった児童が自分のクラスに手紙を書き、自分の正直な気持ちを伝えた。それに対してクラスメイトからの手紙が届き、

それを読んで、一人一人のクラスメイトの気持ちを強く感じた時の本人の感想。

「それはアルコール依存症やギャンブル依存症の回復者に救っていただいた私の責任だ」

赤裸々に表された自身の内面の変化（回復）を読者を置いていくことなく、具体的に語った作品。

「ウクライナで戦争がはじまり、トルコで地震が起き、イスラエルで戦争。悲劇は東経33度で北から南へ下ってきている。（一部改変）」

こんな見方をしたことがなかった。

「とにかく父は頑固になった」

父への複雑な思いを、母と過ごした時間を交差させながら、全文通してテーマを父親として書き通したエッセイ。

「分かってくれない人がいても、分かってくれる人も必ずいる」

分かってくれない場面ばかりが傷をつけてくるが、このように考えることも励ましになる。

「一度しかない短い人生、他人に施しながら生きましょう」

他人への思いやりが社会の中でぐるぐる回って人を幸せにしていくでしょう。

エッセイとして読者を引き込む描写やストーリーなど、受賞作品には質の高い完成度が求められていますが、受賞しなかった作品群の中にも目を引き心を捉える記述がたくさんあります。応募者の皆様がご自分の経験をもう一度見直し、人に伝えるために再構築するその過程の中で、豊かな福祉社会を深く考える人が増えていくことは少しずつではあっても社会に何らかの影響を与えて行くのではないのでしょうか。

今回の募集にもご応募をお待ちしております。特に今まで応募をしなかった方からの作品が増えると嬉しいです。また今回の応募者の皆さん、有り難うございました。

愛恵エッセイ審査委員長
アリス日本語学校横浜校
校長 八尾 勝

第25回 愛恵エッセイ募集



応募方法

応募締切 2023年11月10日(金)必着

対象

1. 学生の部 在学中の方ならどなたでも。
2. 専門職の部 福祉関係の仕事に従事している方。
3. 一般の部 どなたでも。
4. 外国籍の部 日本で就学、就労中の方(日本語表記に限ります)

字数 1,600~2,000字

体裁

東京YMCAホームページよりダウンロードした応募用紙をご使用ください。手書きの場合、400字詰めA4横書き原稿用紙5枚。

応募方法

原則、応募先メールアドレス宛に電子メールにて作品を添付し送信してください。
メール添付が困難な場合、本チラシ裏面の応募用紙と作品を応募先住所までご郵送ください。

注意

- 応募は一人1作品まで、自作未受賞の作品に限ります。
- 応募作品の返却はしません。
- お預かりした個人情報(は本目的以外には使用しません。
- 受賞作品の著作権は主催者に属するものとします。
- 応募後のペンネームの使用の有無と内容、ならびに作品の修正はできません。
- 応募規定を満たしていない場合、作品として受理されません。

賞

最優秀賞……各部1点 賞状と副賞(5万円)

優秀賞……各部3点 賞状と副賞(2万円)

佳作……若干名 賞状と副賞(1万円)

※受賞者は愛恵福祉支援財団のホームページにて発表します。(2月上旬予定)

※受賞者の作品は「2023年度エッセイ集」に掲載されます。(事務局にて表記上の修正をすることがあります。)

※後日、表彰式を予定しています。
表彰式については、応募された方に別途ご案内いたします。

主催：公益財団法人 愛恵福祉支援財団

共催：公益財団法人 東京YMCA

問合せ・応募送付先

東京YMCA会員部内「エッセイ募集係」

〒169-0051 新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会会館6階

E-Mail: kaiin@tokyoymca.org

TEL:03-6278-9071 FAX:03-6278-9072

<https://tinyurl.com/2hq2ufxg>



QRコードから

“豊かな福祉社会を創るために”

— わかりあえたらなあ —

— 2023 年度 愛恵エッセイ賞 受賞作品集 —

2024 年 3 月 2 日 第 1 刷 発行

主 催 公益財団法人 愛恵福祉支援財団
共 催 公益財団法人 東京 YMCA
発 行 者 公益財団法人 愛恵福祉支援財団
〒 114-0015 東京都北区中里 2 - 6 - 1
TEL 03-5961-9711 FAX 03-5961-9712
印 刷 アーク印刷株式会社
〒 114-0024 東京都北区西ヶ原 3 - 66 - 9
TEL 03-3915-4240 FAX 03-3915-4212

非 売 品

